自然がおしえてくれた小さな命

阿見町立本郷小学校　四年
阿部　愛楓

「春って好きだなあ。」
わたしは、春が来るといつも思います。田んぼにおたまじゃくしがいます。成長してかえるになるのを観察するのが楽しいです。登下校の道にはタンポポやつくしが見えるようになり、春のにおいがします。

いつものように春の公園で遊んでいると、木の下に白いたまごが落ちていました。うずらのたまごくらいの大きさです。思わずたまごをひろって手で温めようとしました。すると、ひびがはいっていたのです。

「何だろう。」
と思いました。ドキドキしましたが、わってみました。
「ひなだ！」
初めて見たひなにびっくりしてしまいました。この後、どうすればいいのか、いろいろ考えました。

まず、とう明なコップに入れて様子を見ました。人間と同じように、ドキドキして動いていました。温めようと思いましたが、どうしたらよいか、方法が分かりませんでした。友達に急いで相談して、コップにラップをかけて、風で冷えないようにしました。でも、その時には、ひなは動いていなかったのです。

わたしの手の中の、小さな命は消えてしまいました。鳥のひなは、自分の力で、がんばって自然にうまれないとだめなんだということが、その時初めてわかりました。自然にさからってはいけないのです。

なぜ、たまごが落ちているのかを考えてみました。公園には、木や植物がたくさん生えています。自然がたくさんありますが、近くの道路がせいびされ、新しい学校を建てています。自然を大切にしながら、わたしたち人間のかんきょうもよくすることが大切なんだよと、たまごが教えてくれたような気がします。自然を守っていくからね。ひなさん…。

ピョン太との日々

春日部市立宮川小学校　四年
高橋　空楽

ぼくの家の住所には「かえる」という文字が入っている。家が建てられる前は、田んぼだったからだそうだ。

だからだろうか。ぼくがまだようちえんに通っていたころ。うちの庭に、黄緑色の小さなアマガエルがいた。初夏のアジサイの葉っぱの上にチョコンと乗っているすがたは、とてもかわいらしかった。ぼくと母はそのカエルに、ピョン太、という名前をつけた。

夏になり台風がやって来ると、ピョン太はものすごい風のなか、けんめいに緑のカーテンのゴーヤの葉っぱにしがみついていた。ふり落とされそうになると今度はガラスにピッタリとはりついてふんばっていた。その小さいけれどしっかり開かれたきゅうばんにぼくは生命のたくましさを感じた。

秋になり、風がだんだんすずしくなってくると、ピョン太はすがたを見せなくなった。ぼくはピョン太はどこかに行ってしまったのだと思った。

ところが、春。母が、庭の花の植えかえをしようと土をほりおこしたところ、いきなりピョンッ！ と何かが土の中から飛び出してきた。よく見るとそれはピョン太だった。

ピョン太のからだは、うすいはい色になっていた。ほご色というらしい。冬のあいだ、ピョン太はうちの庭の土の中にかくれていたのだ。すぐ近くにピョン太がいたことにぼくはうれしくなった。そしてその年の夏も、ピョン太は庭の葉っぱの上に乗っていた。

だが、次の年に、ピョン太は死んでしまった。庭の石の上でひからびているのを、母が発見した。なんでだろう。水が足りなかったのだろうか。ぼくと母はピョン太を土の中にうめてあげた。

それからもう、ぼくの家の庭にはカエルが来ない。だけど近所の田んぼからはカエルの鳴き声が聞こえる。もしかしたらピョン太は庭の親せきかもしれない。ぼくは小さな生き物たちの命がずっと続いていってほしいと思う。

◆この作文&体験記録集は、カスミのホームページでもご覧いただけます。